

子供たちと読書ということ

子供たちにとっての「読書作文」

全国読書作文コンクール運営委員会 委員長 西村 忠志

(1)子供たちには読書ができない

読書によって情報を得て、その情報を処理するという作業は、読書の習慣のない子供にとっては苦痛でしかありません。

自分が好きなCDや漫画などを買うのであればともかく、書店に出掛けるということがまずおっくうです。本を選んで、それを買うという作業も、この上なく面倒なことです。「これですよ」と本を与えられるのであればそうでもありませんが、読みたい本なんか無いのですから、簡単に選び出すことができるはずがありません。

本代にしても、親に出してもらえるのであればまだしも、自分のこづかいの中から出すのであれば、それはもういじめに等しいほどとんでもないことなのです。

ページをめくりながら読むという作業も面倒なことです。場所や姿勢がある程度限定されてしまい、携帯電話のように、いつでも、どこでも、好きな姿勢で、指1本でというわけには行きません。更に、読めない漢字や意味の分からない言葉があれば、それを辞書で調べるという作業や、その本で用いられる人名・地名などを記憶して行くという作業も伴うわけですから、大嫌いな科目の勉強をするよりも嫌なことかも知れません。

子供たちには、したくもない読書なんかするよりも、もっとしなければならぬことがいっぱいあるのです。毎日宿題があります。部活動やスポーツクラブなどがあります。書道や珠算などの習い事があります。学習塾があります。友達とのつき合いがあります。おしゃれの研究もしなければなりません。パソコンやゲームもしなければなりません。テレビも観なければなりません。ボーっとする時間も必要です。こうして、家のお手伝いをする時間も無いのですから、読書の時間なんかあるはずがありません。

子供たちには、読書なんかする必要も無いのです。本なんかよりもずっと大量の情報が、テレビなどから絶えず垂れ流しにされていますし、必要な情報がある時には、図鑑や辞書などを読んで調べるよりも、コンピュータなどの情報機器を利用した方が、はるかに速くて便利です。

現代の子供たちは、文章を頭の中で映像として処理するというをほとんどしたことが無いのです。0歳の時からテレビの幼児番組を観て、幼児用通信教育のソフトを利用して、ゲームの画面を観て、パソコンのディスプレイを観て、漫画を見て、というように育ったのですから、映像は最初から映像なのです。文章を映像化するというを、まったく知らない子もいるのかも知れません。

おまけに、一緒に住んでいる身近な大人たちが、誰ひとり読書する姿を示すことも無いの

でしたら、この極めて苦痛で面倒で苦手な作業を、子供たちが自ら進んで始めるわけがありません。

(2) 子供たちは読書を好む

本というものにまったく縁の無かった子供が、1冊の本を読まされ、そして、その本の中のほんの1シーンだけでも、たった1だけでも、心にジーンと来るものがあったら、好奇心をそそられるところがあったら、本というものの世界の広がりを感じることができたなら、この子はきっと2冊目を手にすることでしょう。

さまざまな映像というものにどっぷりと浸かって育った現代の子供たちは、例えそれがバーチャルなものであっても、映像による情報というものを、親の世代よりもはるかに多く記憶として保有していますから、文章の映像化ということを知り、その面白さを知ったなら、大人よりもはるかに多様なイメージを作り上げることのできる素地を持っているのです。同じ本ではあっても、親の世代の人よりもずっとその本の世界を楽しむことができる能力を持っているのです。

他人によって作られた映像ではなく、自分だけの解釈によってオリジナルな映像世界をイメージできるということの面白さを知った子供は、本の世界にはまります。友達とのメールの交換の時間が減り、ボーッとしていた時間は極端に減り、ゲームをしていた時間がなくなり、学校での休憩時間は読書の時間に変わり、本の虫がまた1匹増えることになります。

こうして、ますます映像化力に拍車がかかり、想像力や読解力とともに、やがて思考力や創造力も養われて行くであろうことはもちろんですが、虫になった子には落ち着きができます。時間をかけてイメージーションを膨らませるようになります。このことは取りも直さず、数学の文章題や国語の長文を、きちんと意味を取りながら読むことができるようになるということです。知らず知らずのうちに、立体的に地図をイメージしながら地理の問題を読み、実験結果を映像化しながら理科を、外国に住んでいる自分の姿を想像しながら英語を勉強することができるようになるということなのです。

文章を映像に変換し、それを自分流に操ることができるようになった子は、映像を言葉にという逆のこと、即ち自分のオリジナル映像の内容を、言葉によって他人に伝えることも容易にできるようになります。そしてその言葉を文字に変換すれば、それは作文に他なりません。ですから、本を読むということは、自分のイメージを文章によって他人に伝えるという、作文の力も自然と養われていることになるのです。メールやブログによって文字への変換に慣れている現代の子供は、自分のイメージを文章で表現するということには、むしろ大人たちよりも長けているのかも知れません。

さて、肝心なのは最初の1冊です。全国読書作文コンクールでは、子供たちが読みたくなる本、読書の楽しみが得られる本、作文を書けそうな本であるということなどを基準にして、毎年良書を選んでいきます。どの本を読んでも、どの子の心にも、何か「！」とか「(・_・)」とか「♥♥」ということがきっとあり、「虫」になるきっかけを作ってくれるものと信じています。